

## 「プロスポーツとキャリアデザイン」

江戸川大学社会学部助教授 小林至氏

（福岡ソフトバンクホークス取締役・元千葉ロッテマリーンズ投手）

### 【第1回】少年野球時代のキャリア

-----ホークスはなかなか好調ですね。

小林 ありがとうございます。チームが好調でもビジネスが好調とは限らないのがつらいところですが、なにせ世界一高い球場使用料を払っていますから。ホークスの目標は「目指せ世界一！」なのですが、球場使用料世界一はなかなか厳しい。

-----ホークスと争っているのが、小林先生がかつて在籍しておられたマリーンズですね。

小林 そうですね。ちょうど私がプロ入りしたときに、オリオンズからマリーンズになりました。

-----小林先生は、プロ野球を引退したあと海外留学され、しばらく米国で働かれたあとに帰国して、江戸川大学の助教授になられました。

小林 選挙に出たりもしましたしね（笑）。バカですね。

-----いえいえ。そして現在は、研究者であるとともに、福岡ソフトバンク・ホークスの取締役として、スポーツ・ビジネスの実践にも携わっておられます。スポーツ選手のキャリアとしては、非常に珍しいですね。

小林 ええ、まあ、かなり珍しいといえるでしょう。

-----そこで、野球を中心にして、先生のキャリアと対比させながらプロスポーツ選手のキャリアについてお話しいただければと思うのですが、先生が野球を始められたのはいつ頃でしょうか。

小林 子どもの頃です。私くらいの世代の男の子の多くがそうだったように、ごく自然に「野球ごっこ」に興じていたことを覚えています。はっきりといつかは覚えていないですが。まあ、プロになるような選手なら、小学校のときにはリトルリーグとかボーイズリーグ、あるいは地域の軟式野球をやっているケースがほとんどでしょう。

―――やはり、プロになるような選手は、小さい頃から頭角を現しているのでしょうか。

小林 そうですね。中学くらいでは、その地域の注目を集めている選手がほとんどだと思います。有力な高校に入る人たちは、中学の頃から選ばれて入るわけですから。

―――小林先生のように、そうでない人は珍しい。

小林 珍しいですが、たとえばジャイアンツの上原投手は、高校もたしか普通の高校で、一浪して大学に入り、そこで活躍して注目されるようになりました。中に入ってみるとけっこういるんですよ。まあ例外ですけどね。

―――中学で注目されて、名門校とか新興でスポーツに力を入れている高校に進学するわけですね。その進学というのはどう決まるのでしょうか。高校から誘うのだろうかと思うのですが。

小林 そういう高校はプロ顔負けの情報網を持っています。ただ、プロのように専属のスカウトが日本中を回っているわけではなくて、各地域に野球が好きな、まあ情報のアンテナみたいな人がいる。そういう人の情報が、有力校の後援会の人に入って、監督や部長に入る、といったようなネットワークになってるというような仕組みになっています。そういう人が集まる呑み屋があったりね。

―――有力な選手だと、たくさんの高校から声がかかったりするだろうと思うのですが。

小林 かかります。その場合は選手が選ぶことになりますが、いろいろな要素があります。一般的には、まず試合に出られるかどうか。それから、甲子園に出られるかどうか。それからもちろん、その高校のステータスみたいなものもあります。野球をやっている人間にとって特別な意味のある学校ってのはありますからね。そういったもろもろを加味して考える。慶応からジャイアンツに行った大森選手は私の同年で大阪出身なんですけど、高校進学のときに同時期に清原選手や桑田選手のいた地元のPL学園を避けて、高松商業に進学しました。東北地方や高知、山陰の鳥取、島根などは高校の数自体が少ないですから、甲子園に出られる確率が高いということで、野球留学も多い。横浜から中日で活躍している谷繁捕手は、たしか広島出身ですが、島根の江の川高校に進学しました。

―――なるほど、まずチーム内の競争を勝ち抜けるかどうか。それから、県内の他校に勝てる学校かどうか、ということですね。キャリアという意味では、その後の進路のために名門校に進む、ということはあるのでしょうか。

小林 名門校のほうが有利、ということはあるでしょう。たとえばプロ入りにしても、その次の学年に欲しい選手がいるから、その先輩を取っておく、というのはありますよ。企業でもあるんじゃないですか、セット人事。

―――先輩のいたほうが頼りにできるし、親しみを持ちやすい。

小林 それと、学校、監督に恩を売る、というのもあります。学校にとってもプロ入りした選手がいるということは次の新入生を獲得するうえでやはり売りになる。

————小林先生の場合は、失礼ながら中学では注目されていなかった、例外の方ですね。高校も普通の公立高校と承りました。

小林 私の通った中学には野球部がありませんでした。シニアリーグもやっていなかった。高校は神奈川県立多摩高校で、そこで野球を再開したのですが、まあ県大会で2勝か3勝かする程度のチームでしたが、白状するとそこでもレギュラーになれませんでした。大学でも絶対に野球部に入って野球を続けたいとは思っていたのですが、当然野球で大学に入れるわけはなくて、普通に受験して進学しました。

————早稲田や慶応でも野球部に入ろうと。

小林 いや、そこはさすがに私も身の程は心得てまして（笑）。高校で補欠でしたから、試合に出ないつまらなさはよくわかっていました。ですので、とにかく試合に出たい。絶対に出るんだということで東大に行こうと思った。ただ、高校はそこそこの進学校でしたが、野球やってましたから授業中は寝てたり散歩してたりで、成績は良くなかった。そこで浪人して、浪人の間はさすがに野球もせずに、とにかく勉強しました。

## 【第2回】プロ入りまでのキャリア

————ただ、普通はプロになるような選手は野球で大学に入りますよね。中学から高校に行くのとは違って、高校を卒業するときには、プロ入り、大学、社会人と選択肢がありますが、これはどうやって決まるのでしょうか。

小林 いろいろな価値観があります。たとえば高校でプロから声がかかったとして、将来チャンスがあるかどうかわからないから今チャレンジする、という人もいるし、今プロ入りしても下位指名でありあまり期待もされず、試合にも出られないだろうから、まずは大学や社会人に進んでさらに実をつけてから、という考え方もあります。これは本人が考えるというより、高校の監督とか、あるいはご両親とかが、身近にある前例を参考にしながら決めるケースが多いですね。

————ちょっと意外というか当然というか、高校の通常の就職の進路指導と案外似ていますね。担任や進路指導担当教諭の代わりに監督がそれをやる。

小林 そうかもしれませんね。大学行ってダメなら今プロに行ってもダメなんだから大学に行っておけ、ということをやったりする。プロは必ずしも高卒選手を育てるのが上手いわけではないんです。大学や社会人からもいい選手が入ってきますから、試合出場の機会も少ないし、毎年、新人が入ってくる中でじっくり鍛えて、ともなかなかいかない。高卒をていねいに育てるノウハウは大学や社会人のほうがあるというのが球界の定説です。高卒でプロ入りして活躍する選手というと、イチロー選手は1年目にウ

エステタンの首位打者、松井秀喜選手だって1年めから一軍で試合に出ていました。ライオンズの松坂は一軍で最多勝。このレベルの選手ならば大学に行くのは時間の無駄で、すぐにプロに行くのがいい。しかし、そうでない選手の場合、埋もれたまま、退団ということになりがちで、それならば大学に行っておけば将来、つぶしも利くだろうということになります。こうしたことをを周りがいろいろ考えて決まってくる。考えるのは本人ではなく周囲のことが多い。もちろん、人脈やおカネもあります。

-----言葉は悪いですが、「裏金」といわれているものですね。値打ちのあるものにおカネを払うことが必ずしも悪いかどうかはわかりませんが。

小林 そう思います。プロだけではなく、大学進学でも奨学金という形で少なからぬおカネが動いているといわれていますが、実力に対して相応のおカネを払うのは当然だという価値観にしないとおかしくなると思います。ゴルフの宮里選手にしても、プロになったとたんに契約金が何億円とかで、それでいいわけじゃないですか。それを変に制約したりするから、本人に堂々と払えずに周囲にこっそり払ったりすることになりかねません。

-----高校生は未成年だからとか、高校野球は教育だからとかいう建前は実態に合っていないということでしょうか。

小林 高校野球といたって、名門校の選手は高校の広告塔の役割を明確に担っているわけで、プロみたいなものです。

-----小林先生ご自身の話に戻りますが、先生は高校を出て東大に入り、野球部に入った。試合にも出ましたね。

小林 試合には2年生から出ました。まあ、史上最悪の70連敗を記録して、過去の50連敗を大幅更新、しかもプラス20は私が4年の時ですから、肩身は狭かったですけれどね。当時戦った選手のなかには、さっき話の出たジャイアンツにいた大森選手、まだバファローズで活躍している水口選手、それから慶応で六大学の最多勝利記録を作った志村投手などがいました。

-----それでは、プロとはほとんど無縁の東大が勝てるわけがない。

小林 客観的にみればそのとおりなんですけど、自分たちは勝てると信じて頑張っているのです。ところで、私がいたときはバブル最盛期だったこともあって面白い現象がいくつかありました。六大学0勝の私がプロに行った一方で、六大学で31勝した志村投手は、ジャイアンツがドラフト1位指名するといったのに、それを蹴ってプロ入りしなかったんですよ。三井不動産に就職して、社会人野球もやらずに野球から足を洗ってしまった。まあ、当時は日本のトップ企業は世界のトップ企業ですごく元気でしたし、しかもバブルの時期の不動産ですから、ジャイアンツにドラフト1位で入るより、サラリーマンとして出世するほうが魅力的だと思ったのかもしれない。志村さんとは今でも親しくしているのですが、実に対照的な選択だったと思います。

―――面白いですね。

小林 今考えても、僕の実績でプロに入れたというのは本当に奇跡だったと思います。普通ならプロにはなれないでしょうが、あちこちでどうしてもプロに行きたい、ということをしていたら、いろいろなことがうまくつながって、当時オリオンズの金田正一さんが、じゃあお前テストを受けて見る、ということになって、拾ってもらえた。運や出会いの大切さを感じましたね。

―――たしかに、キャリアには運や出会いが大きくものをいうことがありますね。しかし、テストでプロになる人というのも少数派なのでしょうね。

小林 少数派でしょうねえ（笑）。各球団ともテストはやっていますが、入団するのは他球団を戦力外になった人が中心で、アマチュアがテストで入ることは本当に少ないですね。しかも私の場合は留年してるんです。だから卒業するまでの間、オリオンズの練習生という形で置いてもらいました。そして、卒業するときにドラフト8位で指名してもらって入ったんです。本当に恵まれていましたね。逆に、プロに入ってしまったらそれだけで達成感があって、プロ入りしてからはそれ以前ほどには必死に練習しなくなったのが悔やまれます。

―――社会人野球に進むということは考えられなかったのですか。

小林 いや、現実には社会人で野球をやればそれでいいと思っていたのですよ。本当にプロになれるとは思っていませんでしたし、3年くらいなら野球をやらせてやろうという会社はいくつかあったんです。まあ、やらせてやる、という感じですね。その後はちゃんと会社に残って仕事をしろよと。

―――なるほど、引退したあとが目当てで、野球はたいしてあてにしていなかったわけですね。

小林 全然あてにしていらないですよ（笑）。ただ、ぼくはそんなつもりはなくてあくまで野球をやりにいく、野球をやめたら会社もやめるかもしれない、といったら、ずいぶん採ってくれるという会社が減りましてね。（笑）

東大の選手を取ってくれる社会人野球チームは、その会社に東大野球部のOBがけっこういるんですよ。野球を何年かやらせるから、その後は会社で頑張ってくれ、ということで、それを辞めてもらっては話が違うということです。社会人野球の選手の多くがプロに入りたい希望を持っていますが、なかにはプロ入りにはこだわらず、社会人野球で将来の安定を選ぶ人もいます。同志社大学―日本生命の杉浦投手などがそうでした。ぼくの場合は先の人生のことはなにも考えていませんでした。でも、僕がちょっと変わっていたのは認めますが、日本中が「先のことは何とかなる」と思っていた時期だったという時代背景もあるのかもしれない。

### 【第3回】現役時代のキャリア

―――プロ入りする選手は、ほとんどはドラフト会議で入る球団が決まりますね。これについては選手はどう考えているのでしょうか。どうしてもこの球団、という人もいれば、プロになれるならどこで

もいい、という人もいるようですが。

小林 それは本人の実力次第ですね。元ジャイアンツの江川投手は、どうしてもジャイアンツに入りたいと言って、結局入りましたね。私なんかは実力はないけどなんとしてもプロになりたかったから、球団を選ぶなんて気はもちろんありません。それは実力によってまったく違ってきます。江川投手は高校からプロ入りしたらすごい活躍ができたはずなのに、高校のときは当時の阪急ブレーブス、大学ときは当時のクラウンライターライオンズに指名されて拒否しました。ああいう選手にとってはドラフト制度というのは本当にかわいそうな制度だと思いますね。今は自由獲得枠がありますが、全面的に自由競争でもいいんじゃないかと思います。いくら高い年俵をもらっても、試合に出られないんじゃないかという選手だってたくさんいますよ。

————たしかに、ドラフト制度は選手のキャリアにとって大きな制約になっているでしょうね。どの球団に入るかによって将来もずいぶん違うでしょうし。

小林 そうですね。引退後もずいぶん違ってきますね。だから、試合に出られなくてもジャイアンツにいたいという選手も出てくるわけです。

————実は学会という立場からは引退後のセカンド・キャリアに非常に興味があるわけですが、その話の前に、現役のあいだのキャリアについてひとつだけ伺いたいと思います。以前は現役のあいだはプロ野球の球団の間を動くとか、ポジションが変わるとかいった程度しかなかったわけですが、近年では大リーグに挑戦する選手が増えてきました。

小林 これは日本のプロ野球にとっては死活に関わる重大問題だと思います。今のままでいったら、日本のプロ野球は大リーグの2軍になってしまいますよ。無論、実力も大リーグの2軍並ならそれも仕方ないかもしれませんが、実際には十分太刀打ちできるだけの力はあるのです。だから、早く日米のプロ野球、韓国や台湾を入れてもいいですが、真剣勝負で頂上決戦をするしくみを作って、選手とファンに「世界一」という目標を見せないと、流出は止まらないでしょう。外国人枠だってやめてしまって、日本で野球をやりたい外国人はどんどんやれるようにしたほうがいい。それから選手を球団に縛り付ける保留条項もいらない。そうすると、ドラフト制度とか、契約金の上限だとかも意味がなくなってきます。実際、サッカーの世界にはこうした制限はありません。サッカーの世界では、選手と球団はお互いの同意の元に対等な契約を結んでいます。野球も、選手が自分がいちばん強くなれて、いちばんいい仕事ができる環境を求めて自由に動けるようにしなければ、日本のプロ野球の将来は危ういと思いますね。

————なるほど、選手のキャリアを自由にして、幅も広げるということですね。選手が自分の価値を高めることができるように。大リーグ挑戦もそのひとつだと。

小林 そうです。選手の流出を憂うという先ほどの話と矛盾するように感じるかもしれませんが、そうではなく、世界中の選手が日本のプロ野球でプレーしたいと思わせるような魅力のあるプロ野球にしなければいけないということです。つまり、小手先の流出防衛策を施したところで、つまるところ鎖国するわけにはいかないんですから。結局、現在のプロ野球は、選手にとっても、ファンにとっても、大リ

ーグに比べて、相対的に魅力がなくなっているという状態です。

それにしても、大リーグで活躍することに比べれば、日本で活躍することにはさしたる意味がないという今の風潮に関しては、非常に憂えています、実際にそういう構造になっています。ファイターズの新庄選手などはその好例でしょう。ご存知のとおり、彼はタイガースが何億というオファーをしたのを蹴って、その何十分の一かの年俵で大リーグに行った。大リーグでは日本にいたときと同程度の活躍で、つまりそれほど大活躍したわけでもないのに、「大リーガー新庄」ということで彼の価値はすごく上がった。もちろん、彼自身のタレント性や演出が秀逸だったということも大きかったわけで、その努力と彼のパフォーマンスには私も脱帽している一人ですが、ずっとタイガースにいてもあんなったとは思えない。もっとも、新庄がキャリア設計をしたうえで大リーグに行ったとも思えず、単に最高の舞台とか、夢のようなものを追って大リーグに行ったのだらうと思います。確かなのは、結果的にそれがすごく得になっている。

————目先のおカネではなくて、年俵ははるかに少ないけれど将来につながるキャリアを選択した、ということになりますね。小林先生も、元プロ野球選手だということで、キャリアの面で有利だ、ということはありませんか。

小林 それはありますよ。今は研究者になりましたが、実績はまだまだ乏しいわけですね。それでも、プロスポーツ関係の調査とかだと、あいつにやらせてみるか、という声がかかることがあります。インタビュー調査なんかでも、あいつなら応じてやるか、みたいなことはありますね。先日プロ野球経営論の本を出したんですが、そのときもジャイアンツの渡辺前オーナーにインタビュー調査に応じてもらいましたが、これはぼくが元プロ選手でなかったらたぶんダメだったでしょう。

#### 【第4回】引退後のキャリア

————それでは、プロ野球選手の引退後のキャリア、セカンド・キャリアについてお聞きしたいと思います。プロ野球選手になるまでのキャリアに較べると、世間にはなかなか見えない部分ですが、キャリア研究という意味では興味深い部分です。

小林 まず、現役引退後も球団の仕事をするということはあまりありません。コーチやスカウト、スコアラー、打撃投手やブルペン捕手そして球団職員など、選択肢は幾つかありますが、まあ1割もいません。5%くらいでしょうか。ちょっとおおげさですが、「引退後、99%の人はプロ野球とは関係ない職に就く」とよく言われます。

————仮に球団に残れたとしても、ずっといられるわけではない。

小林 そのほとんどが契約社員ですからね。球団の社員になるのは本当に稀です。毎年、いつ契約を打ち切られるかと心配している。年収もまあ数百万です。で、実際には打撃投手をやりながら用具係もやればビデオ係もやる、というように分担しながら働くわけですが、それでもずいぶん恵まれたほうなんです。

—————そういう人は、いずれは続々と引退してくる人に席を譲らなければいけないわけですね。

小林 そういうことですね。

—————球団に残れる、残れないというのはどこで決まるんですか。

小林 人柄とか。覚えがいいとか。はっきりした基準はないですね。現役時代の実績はあまり関係ありません。

—————指導者になる人はやはり実績でしょうね。

小林 実績と「名前」ですね。ただ、それだけでもないんです。ある程度の実績はもちろん最低条件ですが、それ以外に、フロントの覚えがめでたい、ということもけっこうあるみたいですね。

—————指導力なんかよりも。

小林 指導力も重要ですが、人脈がかなり重要になります。その人がいることで、有能な選手やコーチが慕ってくるということもあれば、その人がいることで年間予約席が売れるといったことも重要です。プロ野球の指導者は大変なんです。野球の技術指導の能力だけでなく、営業的なメリットまで大きな要因になりますから。そもそも、現役時代に名選手だから指導も上手ということではないんです。自分でやるのと言葉で伝えるってのは全然違うんです。自分ができちゃう人っていうのは、教えるのは難しいと思うんですね。プロの技術レベルになると、やってみせてこのとおりにやれ、っていうのもダメなんです。現役時代のプレーとは全然次元の違う能力が求められますね。

—————なるほど、それは現役時代や、引退してすぐに適性がわかるというものではなさそうですね。うまく指導者になるチャンスをつかんで、そこで適性を発揮するとキャリアが開けてくる。

小林 そうですね。で、うまくいけば指導者の仕事のないときは解説者になる、というのがプロ野球引退後のキャリアとしては黄金シナリオですが、そのサイクルまでいけるのはほんの一握りですね。パ・リーグだったらそれこそ名球会クラスでないと厳しいのではないですか。名球会クラスでも下手すると危ない。やはりそこは人気を言う。だから野球選手はジャイアンツに入りたがるんです。ジャイアンツにいれば、レギュラーを一回やったくらいのクラスでも、ある程度行き場所がある。圧倒的に違います。パ・リーグだと、先ほど申したように、名球会クラスでなければ、よほど人脈があるとか、しゃべりが上手いとかでないと大変です。

—————プロ野球の世界に残れば恵まれていて、大半は別の世界に行くわけですが、どういう仕事に向かうのでしょうか。なんとなくスポーツ用品店とかいうイメージはありますが。

小林 飲食店が多いですね。水商売です。



-----それは知名度や人間関係を生かして・・・。

小林 契約金を残しておいて、それを元手に始めるというのが古典的なパターンですが、いまさらサラリーマンもできないな、という気持ちの問題もあります。ただ、最近は少し多様化してきて、サラリーマンになる人も増えています。あと、いい例としては教員になるというのもありますね。これは新たな道として少しずつ増えてきています。

-----なるほど、大学野球の出身なら教員の免許は取れますね。体育の先生とか。

小林 野球選手というと「体育」という印象を持つでしょうが、実は体育はけっこう難しいんですよ。まず需給関係の問題。体育教員になりたい人は多いんですよ。そして結構、難しいのは、取る科目が多いのと、理系の科目が必要なのです。結果、意外と多いのが社会。これまでは教員になっても野球部の指導をするには教壇に立って10年以上という厳しい制約を課せられていたのですが、最近は教壇に2年立てば、できるようになったんです。それで学校も元プロ野球選手を採用したいというのが出てきたんです。それで少しずつですが増えてきた。

-----多数派の話に戻りまして、以前私の職場にいた社会人野球の選手の人から、プロ野球の契約金は退職金の前払いだという話を聞いたことがあります。

小林 そういわれてはいるのですが、実際に「退職金」として大事にする人はそれほど多くないんです。派手な生活したりしてなくなったり、バカみたいな儲け話に乗せられて騙されたりというケースが実に多い。経済観念があるのは、社会人出身の選手が多いですね。高卒大卒にかかわらず、学生野球だけじゃなくて、一度社会人を経験している人はやはり違います。初歩的ですが月給十数万円とかで生活した経験があるとか、少しでも仕事をすれば、予算とか、経費とかの観念もありますし、お客様や上司には頭を下げなくちゃいけないことも知っている。

-----一度やったことがあるから、またサラリーマンになるのも抵抗は少ないでしょうね。

小林 仕事だけではなくて生活全般で、普通の生活、平凡な人生を知っていますから、そこに戻ることができるんですね。その経験がない人が、まったく新たに平凡な暮らしをしるなんていわれても難しいと思います。これが野球選手の最大の弱点なんです。プロ野球選手になるくらいですから、みんなアマチュア時代は花形選手です。二軍選手でも高校のときはヒーローなんです。一軍選手になって年俵が何千万となれば当然生活も派手になります。野球がうまければ尊敬されるという単純な世界で、一般社会みたいな複雑さはないわけです。だから案外お人よしだったりする。そういう人がいきなりややこしい一般社会に放り出されるわけです。そうするとついていけない。野球選手が感じる一般社会とのギャップは他のどの業界より大きいんじゃないかと思いますね。

-----社会人経験のある選手とない選手でセカンド・キャリアに違いがあるのか、というのはキャリアデザイン学のテーマのひとつになるかもしれません。で、契約金を元手に水商売、というのはうま

くいつているのでしょうか。

小林 必ずしもそうではないですね。どうしても金遣いが荒い、やはり見られているくせがついていまずからね。ケチケチできない。商売には向きませんね。

## 【第5回】プロ選手の生涯キャリア

————なかなか難しいのですね。最近、プロ野球OBで作っている全国野球振興会が、引退選手に再就職の斡旋をはじめたというニュースがありましたが、そういう取り組みが必要なのでしょうか。

小林 仕事の斡旋もそうですが、何よりも大事なのは意識面でのサポートだと思います。野球をあきらめて、新しい幸せをみつけなければいけない。それが難しいんです。ずっとスター、ヒーローだった人ほどそうでしょう。仕事の斡旋は第一歩で、とても大切ですが、その前が大事なんです。矛盾した言い方になりますが、プロ野球選手になった瞬間から、引退後のことを考え始めなければいけないんです。これがいちばん必要だと思います。

————なるほど、少なくとも契約金は引退後のために残しておくとか。

小林 それがスタートですね。次は契約金をただ取っておくのではなくて、増やすこと、運用を学ぶ。それから、野球の世界以外の社会との接点をできるかぎり持つようにする。こういうことをプロ入り直後からやっていく必要がある。

————それは一般のビジネスと同じですね。ビジネスを始めるときには、やめるときのことを必ず考えておけ、といわれます。新しい商売はたいはいはうまくいかないのだから、回りに迷惑をかけないように商売をたたむことを最初から考えておけと。プロ野球も個人事業主ですから、同じなのですね。

小林 そういうことを考えているから負けるんだ、なんて言われますけどね。それは古い考え方です。

————それもビジネスでも同じですね。退路を断って背水の陣でやらないからうまくいかない、などと言われます。

小林 それでうまくいけばいいですけど、ほとんどの人はうまくいかないんですから。むしろ、プロ入り前から、たとえば大学で野球をやりながらでは大変だろうけど、教員免許をとっておけば引退後の進路になるわけですね。大学もそういう指導をしてほしい。

————生涯キャリアを考えなければいけないということですね。振興会の取り組みもそういう方向に向かいそうですか。

小林 向かっているようですが、振興会はOB会です。ぼくは、本来、その役割を果たすべきは、選手

会だと思います。

-----そうですね。選手会は労働組合ですし、そういう互助事業をやってもいいですね。

小林 サッカーの方が進んでるんですよ。サッカーは新人教育でボランティアをやらせたりしてるんです。切符のもぎりとかね。まず自分たちのビジネスを理解しようと。どうやって年俵がもらえているのか、ただサッカーが上手ければおカネになるってものじゃないってことを知ろうということですね。スタジアムの清掃とか、営業までプログラムに入っている。

-----サッカーの場合は2部やその下があって、1部で戦力外になった選手の受け皿になったりしていますね。下部のチームだと、別に仕事をして生活費を稼ぎながらサッカーをやっている。ああいう仕組みは野球では難しいのでしょうか。

小林 サッカーのほうがセカンド・キャリアにより熱心にならざるを得ないということがひとつあります。なにせ、稼げる金がぜんぜん違う。サッカーは、Jリーグでも1億円貰っているのはわずか一人。レギュラーで2000万円ももらえればいいほうでしょう。しかも野球よりもなお選手寿命が短い。高校サッカーといっても、甲子園大会の選手のようにちやほやされているわけではなく、やはり、サッカーの選手そして業界の人のほうが地に足がついていますよ。そしてもうひとつ、サッカーのほうがきちっとした仕組みが出来ている。サッカーは全体がつながっていますが、野球はプロとアマが分断されています。引退したプロ選手が社会人野球に入るとするのは最近少し出てきましたが、それもまだレアケースです。本当は、野球という特殊技能、高い技術を生かせる場所があるというのは、選手の引退後の人生だけではなくて、競技の発達のためにも必要なことなんです。日本の野球は、そちらの裾野がありません。

-----野球の場合は、過去の経緯でプロとアマチュアの垣根が高いですね。

小林 これが野球界の発展を妨げている元凶だという認識はみな持っているが、いざ実現となると利権やら縄張りやらでいまだばらばら。サッカーをみると、フットサルがあって、最近ではビーチサッカーなども広まりつつある。一方、野球にはそういうのはないですよ。関わる人が大きくなると、ああいうものは出てこない。野球は学生、社会人、プロが全部分断されていますから、発展性がありません。

-----社会人野球からプロ野球へのレンタル移籍みたいなものができれば、遅咲きの選手や小柄な選手などがチャレンジする機会も増えるのではないのでしょうか。これもキャリアの拡大になるわけですが。

小林 そうですね。そうすると、垣根を作るためにやっているドラフト制度なんてものもますます意味がなくなりますね。プロとアマチュアの垣根があって、選手にとっていいことはほとんどありません。

-----なんとか改善されないのでしょうか。

小林 ここ数年のうちにやらなければ、野球の将来は本当に暗いと思いますよ。ただでさえこの少子化。更に娯楽は多様でみな忙しいときている。そのなかで、子供たちに、サッカーの五倍の費用がかかる野球を普及させるのはそんなたやすいことではありません。そういった環境の中でどうやって野球を普及させていくのか、頭の中で考えてはいても誰も実行しない。体育の授業にも野球はありませんしね。すぐにも手をつけなければいけないことがたくさんあって、ゴタゴタしてる場合じゃないんですよ。

-----最後に、先生ご自身の引退後のお話を。マリーンズを退団されて、米国に留学されました。

小林 どうして留学しようと思ったのか、一度もうまく説明できなかったことがないんですが。ただ、野球はもう終わりだと思ったときに、達成感と虚脱感があって、とりあえず多少の蓄えもあるから何かやろうかと。

-----今年からはホークスの経営にも携わっておられますし。

小林 孫オーナーから一度会おうと電話がかかってきて、2時間ほどディスカッションをして、じゃあ一緒にやろうと誘われました。今は毎週東京と福岡を往復する生活ですが、充実しています。プロ入りしたときといい、今回といい、ぼくは本当に人の縁に恵まれていると思いますね。自分の実力ではありえないような世界に、人の縁で入れてもらっている。今は実務の世界と机上の世界とのギャップに悪戦苦闘しています。いろいろアイデアはあるのですが。

-----プロ野球選手の経験は仕事に役立っていますか。

小林 選手としての技術や知識において伝えられるような偉そうなものは持ち合わせておりませんが、野球選手のメンタリティといったものは理解できると思います。それから、私は野球、特に日本のプロ野球を愛しておりますので、なんとか現在の苦境を脱する一助になりたいという思いは、人一倍強いと思うんです。そして、そのために真剣に考え、本や論文などで著してきました。こうした「気持ち」が、人の縁を呼んでくれたのかもしれない。やりたいことはたくさんありますから、研究と経営の両面から、プロ野球を良くしていくことに少しでも関わっていければと思います。

小林 至（こばやし いたる）

江戸川大学社会学部助教授、福岡ソフトバンク・ホークス取締役。元千葉ロッテ・マリーンズ投手。米コロンビア大学MBA。経営学専攻。主な著書に「アメリカ人はバカなのか」（2003、幻冬舎）、「合併、売却、新規参入。たかが・・・されどプロ野球！」（2005、宝島社）など。